

人間の罪——より弱き者に

今日は受難節第4主日の礼拝を神様にお捧げしています。先々週から4つの福音書の中に記されているイエス様の十字架の場面を、福音書が書かれた順番に取り上げていまして、すでにマルコとマタイの十字架の場面を見てきました。今日と来週はルカの十字架の場面を取り上げて皆で見たいと考えています。そこからどんなメッセージが浮かび上がってくるか、皆で考えてまいりましょう。

さて、というわけで今日は聖書の中からルカによる福音書23:26～43を取り上げさせていただきました。どんなことが書かれてあったでしょう。一つひとつ見ていきましょう。

イエス様を刑場へと連行していったユダヤ人たちは、途中、キレネ人のシモンに十字架を背負わせて運ばせました。当時、十字架刑では死刑囚本人に十字架の横木を担がせて、縦木の建てられている刑場まで連行していく習わしがあったのですが、イエス様はこの横木を自分では担いでいくことができないほど、昨夜の逮捕からの受難によって衰弱していたのです。このイエス様の後を、婦人たちが群れを成して付いてきました。

この婦人たちについて、新共同訳聖書では「嘆き悲しむ婦人たち」と訳されていますので、この人々はイエス様を慕っていた人々で、イエス様の変わり果てた痛ましい姿に涙を流しながらイエス様の後を付いて行ったのだと理解されがちです。しかし、実はこの「嘆き悲しむ婦人たち」という言葉は、厳密には「大声で泣きわめく婦人たち」と訳されるべき言葉でして、そうすると彼女たちは、葬儀の際に雇われて大声で泣きわめくことを生業とする「泣き女」と呼ばれる女性たちのことを指していたのかもしれない。当時、ユダヤの人々はこのように死刑囚に対して、ひどい皮肉ですが、はやその人が殺されてしまったかのように葬儀の列を作るという習慣があったのです。

自分を逮捕し、侮辱し、暴行し、死刑の判決を下しというふうに衰弱させた人々、十字架へと引かれていく自分の周りで皮肉にも葬列を作った人々、自分を十字架につけた人々……、イエス様が十字架におつけになられた時、そこで発したのは、こうした人々に対する呪いの言葉でも、「神様、助けてください」という言葉でもありませんでした。そうではなく、イエス様は、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」と、御自分に敵対する者のために神様に赦しを祈られたのです。マタイによる福音書6:44には、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」というイエス様の言葉が記されていますが、イエス様は御自分の死の前に、まさにこの愛敵の教えを実践されたのでした。

さらに聖書を読み進めてまいりましょう。今日の聖書箇所の後半には、イエス様と共に十字架につけられた「二人の犯罪人」が出てまいります。この「犯罪人」という言葉は、新約聖書が書かれたギリシア語を直訳すると「悪事を行った者」という意味で、宗教的な意味での罪を犯したいわゆる「罪人」と訳されている言葉とは異なって、刑法上の罪を犯した人々を指す言葉に他なりません。また、41節ではこの犯罪人の一人が「我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ」と述べていますから、何の罪もなく十字架に架けられたイエス様とは違って、殺人であったのか、窃盗であったのか、具体的に何を行ったのかは聖書には書かれていませんけれども、ともかくこの二人は十字架刑を言い渡されるほどの何か重大な犯罪行為を実際に行つて、イエス様と共に十字架につけられていたのです。

聖書には、この二人の内、一人がイエス様を罵ったことが記されています。では、この罵りの背後にあった彼の想いとは、いったいどのようなものだったのでしょうか。

ユダヤ教の議員たちの罵りと嘲りの背後にあったのは、彼らがずっと敵対してきたイエス様に対する憎しみの想いだったでしょう。また、十字架刑というのはローマの処刑法ですから、おそらくイエス様は公にはローマ帝国への反逆者という罪状で処刑されたのだらうと考えられていまして、ローマの兵士たちがイエス様を罵ったその背

後には、今は十字架の上で惨めな姿を晒している自分たちの反逆者、敵対者を蔑む残酷な気持ちがあったように思います。

しかし、この犯罪人の罵りの背後にあった想いは、こうした想いとは少し種類を異にしているように私には思えます。彼は別にイエス様を憎んでいたわけでも、イエス様と敵対していたわけでもありませんでした。ではなぜ、彼はイエス様を罵ったのでしょうか。私はそれは、十字架というどん底の状況の中、まさに弱さの極みとも言えるような状況の中で、彼がその痛みにも、また自分を十字架の上へと追いやってしまった自らの罪と弱さにも向き合うことができなかつたからだと思うのです。十字架に釘打たれた痛みには耐えきれず、その絶望の中で、自分の罪や弱さを棚上げにして「お前はメシアだろう。自分と私たちを救ってみろ」と、行き場のなくなった感情をイエス様に対してぶつけた。私にはこの犯罪人の罵りの言葉が、このように聞こえてきます。

彼のこの罵りの言葉から知らされるのは、人は自分が置かれている弱さの状況を受け止めることができないと、より弱き者を攻撃してしまうということに他なりません。こうしたことは現代のヘイトクライムなどでも多々見受けられます。くしくも先月の8日から9日にかけて、私は京都のウトロ地区で開催された全国同宗連の研修に参加してきましたが、そのテーマは「在日コリアンの差別の現状を学ぶ」というものでした。一時ニュースや新聞などで連日のように報道されていましてご存じの方もおられるかもしれませんが、このウトロ地区という所は在日コリアンの町で、2021年8月に在日コリアンに差別感情、敵対感情を抱く青年によって放火された、そんなヘイトクライムが発生した町です。

この犯人は自身がコロナで仕事を失う中、かねてから嫌悪感、敵対感情を抱いていた在日コリアンに対する排外的な世論を引き起こしたいと考えて、まず名古屋の大韓国民団事務所に放火するという第一の事件を起こします。しかしこの事件が期待したほど世間の注目を集めなかつたことから、これに不満を覚え、より大きな事件を起こして在日コリアンに対する排外的な世論を引き起こしたいと考えてウトロ地区の放

火事件を起こしたとのことでした。

2022年8月には京都地裁で判決が出て、そこでは、犯人の動機は「主として、在日韓国・朝鮮人という特定の出自を持つ人々に対する偏見や嫌悪感等に基づく、誠に独善的かつ身勝手なものであって、およそ酌むべき点はない。被害の発生を顧みることなく放火や損壊といった暴力的な手段に訴えることで、社会の不安をあおって世論を喚起するとか、自己の意に沿わない展示や施設の開設を阻止するなどといった目的を達しようとすることは、民主主義社会において到底許容されるものではない」として懲役4年が言い渡されました。

ヘイトクライムは許されないのだという徹底した社会の認識を育む必要性和、刑事罰をも伴う差別・ヘイト禁止法・禁止条例の制定の必要性を強く感じます。研修ではこうした事件が起きたウトロの町で、「在日コリアンの差別の現状」とこうした差別に対する人々の闘い、取り組みを学んできたわけですが、「ウトロ地区の歴史と平和祈念館」と題して講演をしてくださったウトロ平和祈念館副館長のキム・スファンさんがヘイトクライムの特徴について、「生き辛さを抱えている人で連帯すればよいのだが、より弱者を攻撃することに向かってしまう。そして次にいつ誰が被害者になるかわからない怖さがある」と語っておられたのが印象に残っています。

弱さの中に置かれるとより弱き者を攻撃してその生き辛さをごまかそうとする、そんな罪が人間にはあるのです。イエス様の時代から今の時代に至るまで変わらずに続く人間の罪、そんな中で、イエス様は生き辛さを抱えた者同士の連帯を大切にされたと私は思います。イエス様はその生涯の中で、生き辛さを抱えた人々を招き、こうした人々に徹底して寄り添われました。そして、「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」とお教えになりました。イエス様の生涯、それは強き者が弱き者を蹂躪して生きる生き方に「否」を突き付けただけでなく、生き辛さを抱えた者同士が愛し合い、連帯し合って生きる生き方に人々を巻き込んでいった生涯です。そして、イエス様は今も人々を招き、こうした生き方に人々を巻き込んでいこうとして

おられます。そのイエス様の御業に、私たちも教会として加わっていきたいと願います。

最後にいかりや長介さんがあるドラマの中で語っていたセリフをご紹介します。説教を終わらしましょう。こんなセリフです。「強くなることはないんです。弱い自分に苦しむことが大事なことです。人間はもともと弱い生き物なんです。それなのに心の痛みから逃れようとして強くなろうとする。強くなるということは鈍くなるということなんです。痛みには鈍感になるということです。自分の痛みには鈍感になると、人の痛みにも鈍感になる。自分が強いと錯覚した人間は他人を攻撃する。痛みには鈍感になり、優しさを失う。いいですよ、弱いままで。自分の弱さと向き合い、それを大事になさい。人間は弱いままでいいんです。いつまでも弱い者が手を取り合い、生きていく社会こそが素晴らしい。」含蓄のある言葉ではないでしょうか。

このレントの期間、イエス様の愛と福音とをしっかりと宣べ伝えて、悔い改めを広く呼び掛けていきましょう。そして、より弱き者を攻撃しようとする私たち人間の生き方の向きを変えていきましょう。この世界からヘイトをなくして、傷を抱えた者、痛みを抱えた者、弱さを抱えた者同士が連帯し合う世の中にこの社会を変えていきたいと願います。

祈りましょう。天の神様。私たちは強さにばかり憧れます。そして弱さの中に置かれた時、その弱さと向き合えなくて、より弱き者を攻撃しようとしみます。そのような私たちの罪をお赦し下さい。私たちがもっと人の痛みに気づけるようになりますように。そしてその痛みを支え合いながら、弱さの中で連帯して生きていく社会を共に形作っていくことができますように。この一言の祈りを、貴き主イエス・キリストの御名を通してあなたの御前にお捧げ致します。アーメン。